平成23年度　第１回　知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【日時】平成23年６月16日（木）13時30分～15時30分
【会場】小山町総合文化会館　菜の花ホール

１　出席者

・発言者　　御殿場市及び小山町において様々な分野で活躍されている方
６名（男性４名、女性２名）

・傍聴者　　約140名

２　発言意見

発言者	項　　目	頁数
1	御殿場市・小山町に対する平等な情報発信 観光資源を生かした県、御殿場市、小山町のまちづくり	3
2	災害時においても安全・安心な県のまちづくり	5
3	森林整備と資源活用のための支援	11
4	モータースポーツイベント開催時の支援	13
5	環境を付加価値とした販売戦略	19
6	ふじのくに静岡からの修理文化の発信	21
5 （追加）	地元産の木材を使用したペレットの活用 地元の名産、特産品のＰＲ	28
傍聴者	グローバル化に対する対応	31

＜知事挨拶＞

皆様、こんにちは。

きょうは小山町並びに御殿場市の皆様方とお目にかかるのを大変楽しみにしておりまして、今日この機会を持てたことを喜んでおります。

こちらに来る前に、まず御殿場市に立ち寄りまして、富岳会を見学することができました。そこは有名な富岳太鼓がございまして、その演奏も聞かせていただきましたが、入ったときからお花が飾られており、「健心愛」というキーコンセプトを持ってやっている。健康の「健」に「心」、それから愛情の「愛」、健心という、人に献身的に仕えるというその献身と、健康の健と心をかけておられる。そこで富岳という名太鼓、これは天皇陛下から下賜されたお金、下賜金でお作りになったというものでございます。やがて今上陛下、皇后陛下が来られましたときには、太鼓を叩かれたということでございました。その太鼓で障害を持っておられる方々が見事な演奏を見せてくださいました。まことに「健心愛」というのを歌い込んだ、「健やかな心を込めた愛の歌、富岳の太鼓は天にとよめり」という、まことにその歌のとおりのすばらしいひとときを過ごさせていただきました。

その後、つい最近できました樹空の森に行きました。そこには息をのむような大きなパノラマの中に最新式の富士山の四季を、また富士山の歴史を映像で、あるいは立体映像で見せるという仕掛けがしてありました。今日は残念ながら曇っておりましたが、西側の真正面にその建物からガラス越しに富士山を見ることができる。そして北西の方向に温泉があり、しっかり温められるというなかなかの趣向がございました。やがて富士山が世界文化遺産になります。今年の７月にユネスコに向けて推薦状を出すための原案を、まず文化庁に御提出申し上げまして、そして文化庁からそれをユネスコに送り、来年ユネスコの先生方に御覧いただき、最終チェックをした上で、恐らく再来年ぐらいに世界文化遺産になると思います。そうしたときにお迎えする施設の一つとしてすばらしい施設であるということを確認いたしました。

そして、小山町に入り、富士スピードウェイに行きました。社長さん直々に、実際にレースを見るのに一番いい席から説明していただきまして、Ｆ１で優勝したときに立つ優勝台にも立たしていただき、そこで写真も撮ってくださいまして、誠に親切心にあふれた案内をしていただきました。また、事故があったときにどうするかいうことで、いわゆる司令室みたいなところに連れて行ってくださいました。そこには 40 ぐらいの画面があり、全部チェックできるということで、以前訪れた方も危機管理の見事さにびっくりされたとい

うようなことでございました。そういうことを見せていただきまして、その雄大な景色の中でのＦ１がもう１回起こればいいなというふうに強く思った次第です。

すぐそのまま大きな敷地の外に出ますれば、すばらしい北山、森林が広がっておりまして、そこで間伐し、その間伐したものを活用する方法、これを直に御説明、また見せていただきました。昨年の９月８日の台風の際、非常に大きな被害が出たわけですが、やはり山の管理をしなくちゃいけない、管理をしつつ、それを活用しなくちゃいけないという、そういうことを地元の人も思われているし、私もそのとおりであり、それを応援したいというふうに思いまして、こちらに参りました。

そしたらもう１時ちょっと前だったのですが、小山町の連合婦人会の健康づくり食生活推進部の皆さんが、全部地産地消のもので心を込めて昼食をつくってくださっていました。秋刀魚の辛子揚げというのがありましたが、何もかけちゃだめだと。完璧に味ができていると。それを残した人は一人もいない。私なんか、なめこの味噌汁があんまりうまいので、おかわりまでしました。そうして一粒も残さずにいただきまして、ここに来たということでございます。

今日は、私は聞き役になりまして、小山町の方２人、それから御殿場の方４人のそれぞれ地元の代表の方々の御意見をしっかり承りまして県政に生かしていきたいと思います。それからもし時間があれば、せっかくここにたくさんいらしていますので、多分進行の方がフロアからの意見を求められるという機会もあるかと思いますので、そのための心の準備をしていただくと眠らなくて済むということもございます。それではこれから長丁場で３時半までの２時間ほどでございますけれども、何とぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

＜発言者１＞

我々御殿場青年会議所は活動地域を小山・御殿場地区に絞って、明るい豊かな社会を実現するというそういう崇高な理念のもとに 20 歳から 40 歳までの若者が集い、各さまざまな公益的な事業を展開しております。今日は菜の花ホールということなので、小山町の中で一つ事業を取り上げさせていただきます。長年続いている青少年のわんぱく相撲というものを開催させていただいております。

今回震災の影響で春の金太郎まつりが中止になってしまいましたが、それでも４年生から６年生までの小学生を集めて予選会を開いて、最終的に国技館まで連れていくという事

業を脈々と先輩方から受け継いでいます。相撲をとることはもちろん、子供を応援する家族のコミュニティ、そういった今希薄になっている部分、人と人とのつながりといった部分も含めて子供を応援するということ、そういう地域のコミュニティは、僕たちが育ってきた時代はまだ隣近所と非常に関係が深かったのですが、最近はお父さんお母さん、みんな働いていて、なかなか地域のことに構っていられないという現状の中で、今後も、青年会議所としてはそういったものを脈々と受け継いでいくことが、我々の使命じゃないかなというふうに思っております。

また今、御殿場・小山と言いましたけれども、最近ＮＰＯ法人とか、様々な団体、専門的な団体が増えてきた中で、昔はいろいろな小さい事業をこまめにやっていましたが、我々は広い地域というか、最近青年会議所の立ち位置もちょっと考えなければならないなと思っております。やはり専門的にやられている方が多い中で、我々は一体これから何をしていくべきかと思ったときに、最近では、全国で４万人の会員がいますが、この組織力を生かして、県内とか全国的に公開討論会を開いたり、５月３日には憲法タウンミーティングを開いたりとか、より広域にわたった事業展開をしています。

その中で常に地元を見ながら、世の中の全国的な流れとか、あと政治の風向きを見ながら、明るい豊かな社会をつくるという理念のもとに、青年としてできることは何なのかということをしっかり考えながら、いろんな事業展開をして今おります。

今回東日本大震災が起きた中で、県の方では、静岡から出発して５日間宮城県に入るというそういうボランティアの方がありましたが、どうしてもこの御殿場・小山というところで地の利が静岡県の東に当たってしまうものですから、御殿場・小山もそういう災害に対して向こうに行ってみたいとか、我々も何かしていかなきゃいけないのではないか、そういった考えの人はすごく多いと思います。それでも自分でどうしたらいいかわからないとか、誰を頼っていったらいいのかわからないというニーズを酌み上げて表現していくのが青年会議所の役割だろうということで、今回御殿場市と小山町の行政の方に働きかけて、何とかバス代等、資金を工面していただけないかということでお願い申し上げまして、我々が旗を振って、今回６月の末から３回に分けて、御殿場・小山独自でボランティアのバスを出して、第１回目は福島のいわき、第２回、３回目は宮城県の方でボランティアに参加させていただくということになりました。

県に対しての意見としては、まず今回の震災のボランティアに関しても、やはりどうしても静岡市中心になってしまっているのかなというような気がして僕はなりません。どう

しても御殿場・小山は東に位置しますから、なかなか距離的、地理的にハンディを背負っているのかなというふうに感じている中で、県民に対して常に平等にいろんなチャンスを与えていただきたいなというのが、一般市民レベルからの一つ要望です。

また一昨年、上海万博に関しましても、いろんな業者が上海万博に参加していたということを静岡の商業をやっている方からいろいろ聞きましたが、果たして御殿場・小山地域の事業主に対してそういった情報があったのか、いまいちしっかり伝わってこないがために、チャンスを逃してしまった人がいるんではないかなというふうに、私は個人的なんですけれども思います。

最後になりますが、今回この原発に対して静岡県として浜岡原発が一時停止したということで、私は２番目に危ない原発がこの静岡県にあるということを世界に対して公表したことになるので、富国有徳、観光立国静岡としての今後どのように観光資源を生かして、県、また御殿場・小山のまちづくりをしていくのかということを知事から聞きたいなという質問です。以上です。ありがとうございました。

＜発言者２＞

ファミリー・サポート・センターでは、子育てを援助したい人と援助してほしい人がお互いに会員になって子育てを助け合っています。例えば兄弟の参観日のときに下の子を連れていくのがちょっと大変でとか、仕事の時間が早出なので、保育園が始まるまで預かってほしいなど、そのちょっとを手助けして、地域社会全体で子育てを応援していく活動です。

私が会員になったきっかけは、仕事と子育ての両立が難しく、仕事をあきらめた経験があるからです。私も主人も九州の出身なので、近くに子育てを手伝ってくれる人がいませんでした。私のように近くに頼れる人がいない人や、同じ母親として何か協力できることがあればと思い、会員になりました。平成 10 年に御殿場市で発足し、平成 22 年 10 月からは、ここ小山町まで広がり、会員数も 670 名を超えられたそうです。

今回このような機会を得ましたので、一個人の考えを発言するより、より多くの方の御意見を集約した方がいいと考えて、子育て中のお母さん 100 名の方にアンケートをとらせていただきました。その約７割の方が、今の子育て環境に満足しているという回答でした。御殿場市の将来都市像である「緑きらきら、人、いきいき、御殿場」という基本目標に掲げられているように、御殿場市は人と自然に優しいまちだと思います。

子育てに関しましても、とても充実した事業を行っていただいています。その中の一つに子ども家庭センターがあります。ふじざくらにある子ども家庭センターは「遊びの宝箱」と言われるように、好奇心旺盛な子供たちがわくわく遊べる場所です。年齢別に安心して遊べるように工夫されており、絵本や児童書など 3,000 冊もあるそうです。そのほか、各地域ごとの子育てサロンや、学校から帰ってきた子供たちに体を動かすことを教えてくださる放課後体育教室など、子育て環境が整っています。

アンケートの中には、東日本の震災を踏まえた防災に関することが数多く寄せられていました。この地域は東海地震や相模湾沖地震、富士山噴火説など、自然災害が心配されています。このような不安もあり、ここ御殿場市でも東日本の震災直後、市民の方が生活物資の買い占めを行い、店頭では品薄状態が続きました。夜間に災害が起こったらどこに避難したらよいのか、避難施設はきちんと対応できるのかなど、不安は尽きることがありません。実際に被災地では高齢者を中心に避難所で不衛生さや寒さによる死亡が相次いでいて、280 名を超えたそうです。

また福祉避難所の問題もあります。障害を持っている方は普段でも環境の変化に適応しにくく、緊張やストレスからパニックに陥り、騒いでしまいます。震災後、避難所でほかの方に理解を得られず、辛い思いをする方の御家族の中には、「いっそ家と一緒に流されればよかった」とブログに書いている方もありました。私にも知的障害のある娘がいます。もし今災害があったら、家を失ったら、避難所生活を余儀なくされたらと思うと、決して人ごとではなく、ブログにつづられた痛々しい言葉に胸を痛めました。福祉避難所などの施設がより充実すれば、このような不安や辛い思いもやわらぐのかもしれません。

最後に、ちょっと心暖まるエピソードがありましたのでお話しさせてください。震災の後、スーパーに買い出しに行ったときのことです。４～５歳ぐらいの女の子がお母さんから 100 円をもらって、お菓子を一つ手に握っていました。次にお金を支払う場になったときに、「もう私やめておくね、お母さん」と言って、そのお菓子を戻しに行ったのです。その子はレジのところに置いてあった震災の義援金の箱に気がついて、自分から「困っている人にあげてもいいでしょ」と言って 100 円を箱の中に入れたのです。大人が生活物資を買い占めているというのに、何だかその小さな女の子に教えられたような気がしました。そんな心優しい子どもがたくさん育ってくれるとうれしく思います。

いろいろ話をさせていただきましたが、育児に関する御殿場市の充実した制度や施設をより多くの方に利用いただき、お互いサポートし合える関係を築けることを願っています。

また震災を期に、私たち大人が助け合うことの大切さを子供たちに伝えていきたいと思います。いろいろと課題もあると思いますが、皆が安全で安心な県、静岡と思えるまちづくりをこれからもよろしくお願いいたします。以上です。

＜発言者１、発言者２に対する知事コメント＞

それぞれのお立場から大切な問題、これを提起していただくと同時に、いろいろ学ぶ部分がございまして、ありがとうございました。

青年会議所の方は、この地域を本当に愛されているということがよくわかりました。また何といってもまちづくりの基礎には子ども、これをしっかりと青年会議所の人たちが支えなくてはならぬというお気持ちがあふれておりまして、心強い限りでございます。

そうした中で防災の、これは小山町も台風でやられました。あるいはその２年前には８.11 で駿河湾沖の地震もございました。さらにこの前の大震災のときには富士宮でも震度６を一部計測したということで、けがをされた方もいらっしゃいます。実際、富士山もいつ噴火するかわからないと。我々の子どものときには休火山というふうに教わりましたけれども、現在の科学では今日噴火しても別に不思議ではないというようなことでございます。そうした、殊に防災に備えるためには、そういう危機感というか、いざというときにちゃんと備えがあるための心の準備をするためにボランティアを派遣したいとおっしゃいました。

県が静岡市中心で、ほかのところに余り目を向いてないと言われまして、もう本当に反省しております。そのようなことがないようにと思いまして、今年の１月までの数字ですが、僕は 500 回ぐらい公務で静岡県下を出歩いているわけですけれども、恐らく一番多いのは東部ではないかと思います。西部は御承知のように浜松がございまして、特別自治都市をつくりたいと。つまり県から独立したいと言っているのですね。県の中に浜松県をつくりたいとおっしゃっている。それに呼応して、静岡市長さんも、それはいいことだと、県から自立するということが地域分権の基礎だとおっしゃっておりますので、じゃ西部と中部はあなた方しっかりやってくださいと。ただ西部も浜松と言っても広いので、天竜の北の方ですね、そうしたところは人口が少ないですから、そこはこちらでしっかりと見てまいりますと。静岡市も井川とか遠いところは非常に厳しい自然環境です。そうした中ですばらしい集落がありますので、そこについて私たちは協力してやりましょうと。

東部の方はたくさんの町もあり、市町が協力するということが大切で、それの仲介役を

しなくてはいけないと思っておりましたので、これから特に青年会議所の意見を東部地域支援局長がいるわけです。私の方も現場を抜きにして、デスクの後ろでふんぞり返っているのはだめだと。一番よく現場を知っていると、生活を知っていると、人の声を聞いているということが仕事ですというふうに言い、また、かつ自分でもそのつもりでやっているつもりでございます。特に青年会議所、こういう子育てのためにやっていらっしゃるということで、私はこれから倍旧の関心を持って、この次お目にかかったときには大分よくなったというおほめの言葉をいただくようにしたいと思います。

それから原発がとまって、これは福島原発の場合には災害で強制的にとまったわけですね。そのために計画停電ということで、東部の地域が非常にひどい目に遭われたと。それは特に観光業、例えば40万件キャンセルがありましたが、30万件のキャンセルは伊豆半島と言っています。計画停電ですから、例えば坂や山が多いですから、水道水を電力で上に揚げるのですが、揚げられないものですから、水が使えないので、文字どおりホテルや旅館を閉じないといけないので、大変だったのです。

ですから計画停電の被害というのは、富士川以東の東部、伊豆半島、私は実は中電の社長に、清水と佐久間で40万キロワット分のそれを60ヘルツから50ヘルツに変換して送れる能力があるので、まず1万 8,000 軒が停電した東部に最初に送ってくれと、直に言ったわけです。そしてそれを東電に伝えてほしいと言ったのです。伝えても、東電は東電で電力をどのように配分するかは彼らの自由で、自分は命令することができないと。それは自由かもしれないけれども、川勝が言っていると伝えてくれと。そうした中で今度は中電が、自分たちの意思で、もちろん首相の要請もあり、十分な理由があってお止めになった。

原発事故というのは想定外だったのが想定内になった。放射能漏れというのは想定外だったのに想定内になった。津波10メートル以上が想定外だったのに想定内になった。全部それが想定内になったときに、浜岡はどうするかというときに、お止めになった。そのために360万キロワット分が失われたわけです。

この 360 万キロワットというのは相当な量でございまして、毎日毎日電力情報がＮＨＫで出ますでしょう。それで東電全体で4,400万キロワット出せると、そのうち今日は3,700万キロワットぐらい使っていると。その10分の1が失われるということです。そうすると中電から東部の方に電気を送るという余裕もなくなってきているということなのです。

ですから計画停電みたいなことがあっては絶対ならないし、そのためには節電の努力であるとか、自家発電の努力、あるいはもし何かがあったときに、避難する。これは冬だと

寒いです。私は３月の末に大槌町、あるいは山田町に行きました。外で雪の降る中、たき火されているわけです。寒いですよ。そういうところにやっぱり自家発電の設備がないといけないということで、そこに行って気がついたので、自家発電の設備を５月の補正予算でもう計上してあります。

そういうふうに防災から学ぶということをやっておりまして、そういうところに青年たちを派遣するというのはいいですけれども、実は行ってもすぐに役に立つものじゃありません。やっぱり本当にこれは気持ちではなくて、役に立つかどうかということがありますから。行って役に立たないということを知ることだけでも、もちろん大事ですが、邪魔してはいけません。ですから私どもは、最初はプロを送りました。

そして、福島とか宮城に行かれるとおっしゃっている。しかし福島と宮城の受け入れ機関がちゃんとあるか、やるべきことがあるのか、プログラムはどう組まれているのか。こうしたことは全部こちらで 90％ぐらい準備した上で行かないと、向こうの人に本当に迷惑をかけるということになります。

皆さん思い出してください。阪神・淡路大震災のときに、皆駆け付けました。駆け付けた人が道路にいるでしょう。そうすると救急隊が入れないわけです。ですから本当に行くべき人が行けないということになって、混乱が増幅して、死傷者が増えたということがありました。ボランティアの精神は大切です。しかしその人たちが二次災害に遭ってもいけません。

したがって、我々は全国知事会から岩手県を担当してくださいと言われ、遠野に拠点をつくりました。そこで見事に機能しています。我々の県の持っている前のところに広場がありまして、ボランティアの組織の人たちがそこに建物をつくって、いろいろと指示をしてくださっております。そういうところとも連絡をとられて、宮城、福島に今回行かれるそうですけれども、向こうの情報をよく知ってください。水を持っていれば、必ず喜んでもらえるとは限りませんよ。そのときそのとき必要なものが違うのです。親切心でやるということと、ひょっとすると結果的には邪魔になったりするということもあります。そうしたことでボランティア精神を培うということと、本当に救助するということの難しさ、そのためには本当に力をつけなくてはなりません。そういう防災力を我々が手に入れております。

ちょっと話が前後しましたけれども、私は、ここは観光がとても大事だと。これは世界文化遺産になる。それからジオパークに伊豆半島がなる。そうすると富士山、箱根、伊豆

半島、これはもちろん山梨県、神奈川県、そして静岡県にまたがっていますけれども、観光に来る人にとっては、それは関係ありません。ここからここまで小山町で、ここからここまでが御殿場市だということは関係ありませんので、連携をしなくちゃいけない。

例えば私ども県庁の役人は、連休のときに旅行に行っている。なぜ行ったか。それは旅館に行けば、そこで仕事を旅館の人ができるからです。だから県庁の役人は皆家族旅行に行きなさい、あなた方は首切られないでしょう。特に昇格した人は給料も上がっているから、それを全部使いなさい、そうするとそのお金が回るというふうに業務命令、私自身も連休中に西伊豆、最も人が行きにくいところに行きまして、そうしてお金を回す。だからただ遠いところに行くだけじゃなくて、この域内で人が回るだけでも大分違うのですね。

御殿場はいわゆるサッカーする子どもたちがいますでしょう。その子どもたちをそこで預かっています、時之栖で。あの子たちはやがてプロフェッショナルになりますよ。だけど今豊岡中学校、高校、向こうは残念ながらもうサッカー場がコンクリートに覆われています。自衛隊が現場に入って、放射能を浴びていますから戻ってきて、そこで洗車をするわけです。だから土じゃまずいのでコンクリートが敷いてあるから、もう戻れないのですね。その青年たち、子どもたちがすぐそばにいますね。そういう子どもたちを助けるということも、これまた支援になるということで、支援の仕方はいろいろあります。

そうした中で今お聞きしましたら、小さな女の子が自分のお菓子を買うかわりに、義援金を見つけて 100 円を入れたと。こういう親切心、これはすばらしい。なるほど、買い占めをした人もいたかもしれないけど、基本的に御殿場・小山町に住まわれている親御さんのお心遣いが、そのまま鏡のようになって子どもに映っているのだというふうに思います。そして御殿場の人たちに聞けば、70％の人が子育てに満足しているというふうに言われたというのはすばらしいことです。そして、２年前は８万 8,000 人であった御殿場が、今 10 万人を超えたというのはすばらしい。

あとはそういうふうにして九州、首都圏、東北から移り住んで来られるような人たちが来たときに、最初一時的にここで終の住みかになるかどうかはわからないと思っていたかもしれないけれども、やっぱりここがいいと、日本のシンボルは富士山じゃないの、これがここにある。鹿児島にも富士はあるけれども、薩摩富士、いわば小さな富士です。岩手にも岩手富士がある。あれもやっぱりちょっと形が違う。やっぱり日本の富士はここの富士だというわけで、ここに住むのがやっぱり日本一いいところだと思えば、住めば都で本当にいいところになるに違いないと。そういう交流人口を通して、知らぬうちに定着人口

になる。

しかしやっぱり一番大切なのは子どもを育てやすい、かつ産みやすいという環境をつくることで、学者は皆ずっと減っていくと言った。今本県は 1.48 まで上がりました。女の人が 50 歳になるまでに何人子どもを産むかという、平均 2.07 人産まないと、人口維持できないのです。日本では 1.3 ですね。それが本県では若干高いのですが、まだ 1.48 レベルです。これが少しでも高くなるようにするためには、やはり男女共同で、特に地域の人たちが地域で子どもを産み育てやすいようにすると。特に私は子育てを経験し終わった人、子どもが自立した人、例えばここの連合婦人会なんていうのは、その最たるものです。そのような方たちが、子どもたちの健康のために、食生活のためにやろうとされている。その人たちがもう一歩突っ込んで、保育園や、あるいは幼稚園で仕事をされている方のサポートみたいなことを地域でされていきますと、男女共同で働いているような若い親御さんたちにとって、どれほどの大きな力になるかわからないということでございます。私はその可能性はここにあると思います。

そしてこれほど美しいところでありますから、観光資源には恵まれていると思います。ちょうど青年会議所が小山町と御殿場と一体でされている。観光客にとっては、そういう行政区は関係ないという観点から、地域のリーダーの皆さんがそういう機運を醸成してくださって、一体で、情けは人のためならずで、自分が小山町なら、お隣の御殿場のために、おれは御殿場だ、しかし隣の小山のために、お互いやるということが、結果的に好循環を生んでいくに違いないというふうに思っております。そんなことで、さらに裾野までというふうに広めていく。環富士山ぐらいに広めていくというぐらいのつもりで、あるいは環箱根というふうにして広めていく。そうしたことが結果的に小山町にも御殿場市にも役に立つことになるだろうというふうに思っているわけでございます。とりあえず長過ぎたコメントで申しわけありませんでした。

＜発言者３＞

私たちＮＰＯ北郷創林隊は、県が平成９年に募集した森づくりモニターをきっかけに、森林育成の奉仕活動を通して自然に親しもうと、北郷森林ボランティアの会として発足をいたしました。後に県の要請で北郷県営林の育成管理を手伝うことになり、名称も当時の東部農林事務所長の命名によりまして北郷創林隊に改めて、森林の管理や境界の巡視などを行ってきました。さらに平成 14 年９月に森林資源の保護及び有効利用と、中山間地域の

活性化の推進に寄与することを目的に、ＮＰＯ北郷創林隊として組織を充実させ、活動を大きく広げました。

私たちの活動を紹介させていただきます。森林育成の奉仕活動を通して、自然に親しんでいただこうと、地元の北郷小学校に緑の少年団を組織していただきました。広葉樹の植林やシイタケのほだ木づくり、数キロ先の滝から引いた水を使った滝飯づくりなど、子どもたちの自然体験活動を支援しております。自然と向き合う子どもたちの生き生きとした様子は、私たちの活動の励みになっております。また町民の皆様には古道を整備し、三国山周辺のハイキングを企画し、春の新緑、秋の紅葉など、森の心地よさを満喫していただいております。

一昨年３月に北郷県営林が県から小山町に返地されたとき、この森林を「北郷の森」と命名いたしました。県、町、ＮＰＯ北郷創林隊の三者が協力して、小山町北郷の森共同管理計画をつくり、私たちが町から管理を任されております。今後はこの北郷の森を多くの人に憩いの場として利用していただけるよう整備していきたいと思っております。

さらに、ここ数年主たる活動として森林整備事業に力を入れております。きっかけは５年前に始まった森の力再生事業です。同町には森林組合がなく、戦後植林した人工林にほとんど手が入らず荒れておりましたので、当初は活動資金獲得のために事業に取り組みました。しかし自然と親しむ活動や北郷の森の管理を手伝う中で、森の大切さを痛感するとともに、森の力が急激に減退している森林が増えていくことの危機感を覚えました。どうしたら小山町の森林が蘇るのか、これからは何が必要なのか、県内外の事例を学び、本格的に森林整備の研修を重ねてまいりました。同時期に県では利用間伐の遅れている北駿地域の団地化のモデル事業に指定し、力を注いできておりますので、これまでの研修、経験を早速役立てることができました。

まず森林の状況を詳しく把握するため、平成 21 年度の緊急雇用創出事業を活用し、小山町の森林資源の調査を実施いたしました。続いて、調査で得た森林の資料をもとに、各地区で森林整備についての説明会を開催いたしました。森林所有者へ現状を伝え、森林を健全な状態に保ち、価値を高めるには定期的な間伐が必要なことや、施業地集約化と高密度路網開設による利用間伐によって所有者に負担を課さない森林整備が可能なことなどをお話しました。森林所有者の皆さんの御理解をいただき、地元の林業事業体とＮＰＯ北郷創林隊とで北山地区の森林整備協業体を組織し、私たちが代表となって利用間伐の事業を昨年より実施しております。

小山町では昨年９月の台風９号の集中豪雨により、山林崩壊が発生し、立ち木が流出し、下流では甚大な被害が発生いたしました。山林の崩壊は森林の崩壊が一因となっておりますので、災害に強いまちづくりのためにも、私たちが森林所有者と林業事業体を結ぶ要となって、小山町全域の森林整備の推進のため、その一翼を担っていきたいと、このように思っております。

なお、青少年育成のための自然体験などの活動資金を、これらの事業で捻出できればと思っております。今後、知事におかれましては、さらに多くの森林所有者の意識を高め、もっと広く、そして条件の厳しい山々にも森林整備と資源の活用の手が届くよう、資金面など、側面からの支援をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。以上でございます。

＜発言者４＞

モータースポーツというかレースの活動をしておりますが、日本におけるモータースポーツの評価というのは、ほかのスポーツと比べると非常に低いのが現状です。この機会をお借りして、少しでもモータースポーツというものを皆さんに理解していただければと思っています。

小山町はグレードＡと言われるＦ１が開催できる富士スピードウェイという立派なサーキットがあります。Ｆ１を開催できるサーキットというのは、世界で 20 余りしかありません。そういうところから考えますと、富士スピードウェイというのは、世界に誇れるサーキットです。ここでは現在、日本の大きなレースがたびたび開催されています。大きなレースでは関係者だけで 1,500 名の方が大体３日間、御殿場市あるいは小山町に宿泊されています。そして数万人の観客がおおむね首都圏を中心にして集まっています。

では世界はどうなのかと考えますと、今年のＦ１世界選手権は 19 カ国で開催され、テレビは世界 180 カ国で放映されています。5 億 5,000 万人がテレビの番組を視聴しています。Ｆ１の開催は膨大な資金が必要なために、多くのＦ１の開催には公的資金が投入されています。何で公的資金が投入されているかというと、その理由は世界から来場する観客からの収益を見込んでいることと、もう一つは、その開催する町、あるいは国の知名度を上げようというところからです。それができるのは、市民がＦ１を望んでいるからで、ちょうどオリンピックを開催しようというふうにその市が考えるのと非常に似ています。これはサーキットだけのイベントではなくて、世界中からやってくる観客と一緒に楽しもうとい

う感覚で、お祭りですね。一つの大きなイベントとしてとらえています。

では、どうしてモータースポーツがそんなに人気があるのかというと、いろいろな理由がありますけど、モータースポーツは欧米では当たり前のスポーツです。それは車があって、それを運転するドライバーがいれば、じゃどちらが速いかということを競い合うようになる。駆けっこの速い子ども同士が、駆けっこの競争をしようよという原点はそこからきています。ですからモータースポーツは、ドライバースポーツという名前にした方がいいぐらいのスポーツなのです。そこのところがちょっとわかりにくくて、なかなか理解されてないというところがあります。

このことを欧米の方々は非常によく理解されています。ドライバースポーツ、だから人間同士の戦いなのだというのをすごく理解されています。ですから優勝したドライバーに対して非常に大きな賞賛を与えるわけです。日本でももちろん理解している人はいますけれども、ほんの少しです。日本は多くの車を生産して、車のない生活は全く想像できない状況にありますが、モータースポーツに対する理解は薄いのです。

どうしてでしょうか。それはドライバーの高度の技術を理解することが難しいからです。我々は普通に車を運転しており、その中には車の運転うまいよねという人もいますけれども、その通常の車を運転している同じ線上にレーシングカーの運転というものがないのです。例えば普通の我々の運転ではタイヤをきしませることもないですし、タイヤの限界を極めるようなこともないです。でもモータースポーツといって、レーシングカーを運転する世界になりますと、タイヤの持っている、タイヤと路面がくっつく限界のところで走らない限り、速くは走れないので、レーシングドライバーは体でタイヤの限界を見極めようとします。我々が通常の普通乗用車を運転する世界とは全く違うことになります。

どういうことかといいますと、例えば皆さんはよくゴルフをやられると思います。石川遼選手がすばらしいバンカーショットを打ったときに、みんなそのうまさに驚嘆して拍手を送ると思うのです。でもそれは自分の持っている能力と、石川選手がすごく高みにいる能力が一つの線上につながっているために想像できるわけですね。あんなショットを簡単に打てるのは、それはすごいことなのだというのがわかるから拍手をするのだと思います。

ところがレースの世界というのは、その一直線上の技術の流れにつながってないのです。特にテレビでＦ１を見ていると、誰もが簡単にＦ１を運転できるような感覚になってしまいます。これが多分、いわゆるレーシングカーを運転する、あるいはＦ１を運転するという世界が、我々普通の人間にはなかなか理解しにくいというところになっています。

このような理解されにくいモータースポーツですが、もし理解をしていただけるようになったとすると、富士スピードウェイを利用した安全運転講習会など、第二東名を視野に入れて 120 キロでの走行訓練をするといった活用方法もありますし、高速道路を利用する一般の人が受講してさえくれれば、無益な事故が減ると思います。若者への安全運転の啓発にも役立つと思います。

あるいはもっと県民にモータースポーツを身近なもの、当たり前のものに感じてもらうためには、富士スピードウェイが開催する国内の大きなレースイベントの際には、必要があれば時限一方通行の導入や、交通整理のための警察官の配置をするのもいいと思います。富士スピードウェイ周辺の方々の迷惑にならず、スムーズに車両が移動できる方法ですし、観客は多くの経済効果を地元小山町と御殿場にもたらしてくれます。観客がスムーズに来場し、気持ちよく快適に過ごすことができれば最高なことだと思います。きっと楽しかった、あるいはまた観戦に来ようと思ってくれるはずです。行政がモータースポーツに対して理解をした対応を示していただけたら、我々自動車関係のすべての人たちにとって、この上ない幸せだと思っています。

一つ皆さんにお知らせするというか、知っていただきたいことがあります。モータースポーツを四十何年間私がやっていて考えていることなのですが、レーシングカーというのは、レースをやっているときに当然いろんなことが起きます。我々の物の考え方というのは、スペアのスペアのまたスペアというふうに考えます。たとえ部品がなくなったとしても、ではその部品をどうすれば短い時間でつくることができるのかというようなことをどんどん考えていきます。ある機能を失ったらどうするのだ、それはこういう手があるというようなことを考えています。それはいろんな分野で役立つことだと思います。

今すごくいろんな場面で想定外ということで逃げている人がいます。技術屋として私の立場からいくと、とても想定外という言葉を口にできません。それは、「おまえはばかだろう」「何も考えてないだろう」ということとイコールになってしまうので、そうではなくて、何かが失われたときにはこの手があるぞ、それが失われたときにはこの手があるぞということを考えておく、それが多分この世の中をすごくスムーズにして、住みよい世界にするには大切なことだと思います。よろしくお願いします。

＜発言者３、発言者４に対する知事コメント＞

どうもありがとうございました。森の話と自動車の世界、対極のお話をされたのであり

ますが、それぞれまことに聞き応えのあるお話だったと存じます。

まずＮＰＯ北郷創林隊として、子どもの森林への親しみを深めたいと言われているのは本当に大事なことです。単に森林づくりではなくて、人づくりをお考えになっているというのがいいと思っております。

さて、そうした中で今、本県全体の森林が毎年 100 万立米ぐらい使えるのです。しかし実際はその３分の１しか使っていません。使えるだけのものをずっと数十年間やってきたわけですから、これから 200 年間ぐらい使えるのですよ。それぐらい持っているのです。それについて活用していないのです。だから誰かがやらなくちゃいけない。今回の災害で、流木が流れまして、相模湾に流れて、そして神奈川県の方たちも非常に困られていたと。我々も改めて森をしっかりしてないと、つまり治山ができていないと治水ができない。治水をするためには治山をしなくちゃいけないということで、このたび思いきりこのＮＰＯを立ち上げられて、その森林を所有している人たち、事業者、その人たちの間を結ぶということで事業を始められて、今日その現場を見に行ってきたわけです。そして１年間で大体 1,000 ないし 1,500 立方メートルぐらい分の森林を間伐材として切り出すと。これはペレットであるとか、その他建材にも使えると、既に需要があるということでございました。大変結構なことだと思います。

しかし、私は、まだ需要が十分ではないと思っています。やっぱりこういうコンクリートのものをつくる文化が相当多いので、これをコンクリート、それから鉄筋プラス木造と。いわゆる鉄筋コンクリートか、木造かというどちらかではなくて、鉄筋木造コンクリート。何もこの後ろにある柱を、鉄筋をセメントで、コンクリートで巻く必要はありません。芯に立派な丸太を入れて、上下を鉄でしっかり挟んで、土台はしっかりコンクリートでつくるとか、あるいはこういう壁材のところは森林のものを使うとかいうふうにしますと、幾らでも鉄筋コンクリートか木造かというどちらかではなくて両方使えるはずです。いわゆる鉄筋コンクリートの技術は日本が今世界一です。あるいはコンクリートを使う、あるいはセメントを使う量は一時アメリカを超えていました。それぐらい使っている。そして木造を、あるいは木を使わないできた。これからそれを使っていきたいと思っております。

そして、そのためにはそれを加工する技術も必要で、加工するために大きなところがあります。何しろ扱うのが切ってきただけでも４メートルとか５メートルとか、一番短いものでも３メートルぐらいで切ってきますから、それを乾燥させる、あるいは加工する、それを製品にするというためには、相当に精密な機械でなければならないし、相当に広大な

土地が必要です。そうしたものは日本に必ずしも多くないのですよ。

私はそうしたものの一つを既に見に行ってまいりまして、そこは静岡県の銘木を活用したいということで出てきているわけです。そうしたところは、本県にあるのはほとんどＡ材だと。ＡＢＣに分けますとＡが高いもので、ＢＣがどちらかというと低級ということになります。８割はＡ材なのですよ。今日聞いたら、間伐していられるのも全部Ａ材なんですね。つまり加工する必要がなくてそのまま使えるという立派なものです。ですから、私は、Ａ材は建材に使ってもらいたいと。

だけどどうしても木を例えば三角に切るとか、あるいは四角にすると余りますね。どうするかということで一切無駄にしないために、合板にするとか、あるいはそれを燃やしてエネルギーを使って電気を起こすとか、いろいろなやり方があるのですよ。あるいはペレットをつくるというのも、そのうちの一番簡単なやり方ですけれども、そういう技術を入れようと思っているわけです。その木造をしっかりと入れ込んだ建物をつくってまいりたいというふうに思っております。

そういう木造を使う、あるいは木を使うという文化をもう一度、文字どおり「木使い」ですね。これを励ましてまいりたいと思っております。

実は、ここはしかも桧でしょう。小山町は桧ですよ。日本一の桧です。その日本一の建材である桧がほぼすべてを占めている。それはどうしてか聞きましたらば、桧は、下がいわゆる火山ですから、根をなかなか下に張れない。桧は横に根を伸ばすから、この土地に合っていると。そしてもちろん桧の方が建材としては品質が杉よりも優れているという評価がございますので高く売れるという、そういう土地に合って、かつ経済的な合理性を追求して桧をつくってこられて、それが今使える状態になっているので使いましょうと。桧は使ってくれという火のような思いで今それを我々に訴えかけているので、そこに子どもも入れてやっていこうと、こういうわけですね。

ですから皆さん、そういうことで、何か公共事業、あるいは何か建物をつくられるときに、何とか使ってみようじゃないかと。最初は高いかもしれませんけど、どんどん使っていくと、やがて競争が出てきて、何しろ使える木がたくさんありますから、やがて価格も下がってくる。最初は大変です。私も初期投資はしっかりやると決めてあります。大事なことは、切り出したものが使える、ちゃんと需要がある、消費する人がいるということなので、その点どうか念頭に置いていただいてくださいませ。

それから、やっぱりさすがミスターモーターということでミスターオートモービル、こ

の人は、ホンダがＦ１から撤退すると言ったらやめちゃったのです。突然イギリス行っちゃった。そして、だけども日本のためにというので、ここに戻ってきて、そこのスピードウェイのすぐそばでつくっておられるわけです。本当に車を愛されている。その車の限界を突き詰めてきた人です。

そして車をつくる技術は、これは近々100 年のことでありますけれども、しかしもちろん 19 世紀まで遡りますが、実際には 500 年余りのことです。そうした中で日本の技術はトップになりました。そのトップを持っている人です。ほとんど匠ですね、昔の言葉で言うと。マエストロなわけです。そういう方が言うことはちょっと違うのです。自分のつくった技術は、普通の人が運転できるものじゃないということをよく御存じだ。よほど訓練し、よほどしっかり危機管理をし、よほどいわばスピード感、あるいは運動神経が発達し、技術をしっかりと身につけて、そしてできる人でないとこれはできない。

しかし、一旦その技術の高さとか、あるいはマシーンのすばらしさがわかると、これは人類が到達した人間を運ぶもの、しかしそれ自体が一つの文化になっていると。大地を走る、疾風するその文化をつくりたいとおっしゃっている。それが世界でＦ１が開けるのは 20 カ所ぐらいしかない。日本に２カ所あるでしょう、鈴鹿とここです。西の鈴鹿、東のここでやらないでどうしようか。

そのためには年間に何回か行われる国内のいろいろなレースというものに対して、それを大切にするということがないとできないからとおっしゃっていただいているのですね。それを我々、この御殿場あるいは小山町、特に小山町に住まわれる方の理解がないといけないと。もちろん怪我してはいけないので、そしてまた観客の人が来られると、それはもう当然その人たちはお泊まりになる。いい気持ちだと１日のところを２日、２日のところを３日、３日のところを１週間というふうに延ばされるということになると何が起こりますか。お金を落としていかれるということになりまして経済が回るということなのですね。だからすばらしいと思うと、結果的に経済が潤うということで、経済を潤すためにではなくて、すばらしいように人のおもてなしをするために、行政はちゃんと協力しろと言われている。警察も協力しろと言われている。わかりましたというふうに私は申し上げたい。

それで今すぐどうしたらいいかということについては、道路事情などについて、必ずしも私今つまびらかにしませんので、どういうふうにするとお越しになる人も、また日常生活される方もお互いに迷惑しない、そして怪我もなく、だれも彼もがそのときはそういうものだということで理解し合って、そのレースを支えていくことができる。やがてＦ１が

来ると、これはお金がもう何十億、あるいは何百億というお金が動く、そういうものになるそうでございます。

世界中の人がそれを見るということでございまして、それを富士山の麓でやる。それはもう伊勢湾でやるよりも、何といったって富士山ですよ。これを励ましてまいりたい。そして日本で一番最初にＦ１が挙行されたのがここ、富士のスピードウェイだったと。そういう記念すべきところでございますので、今こういう人が元気である間にやっていかないといけない。こういう人は宝物です。一朝一夕にどうしてもできないということでございますので、後継者がしっかり底辺を広くしていく、裾野を、あたかも富士山のように、自動車文化を、モータースポーツの文化を広めていこうということをおっしゃっているので、ぜひ子どもたちも含めて、理解を深めると、自動車の事故もかえって少なくなるというふうに思います。今日はいいお話をありがとうございました。

＜発言者５＞

農業者を代表しまして、少しお話しさせていただきたいと思います。

今日のここの前の装飾ですけれども、バラは全部うちのバラを提供させていただきました。遠くの方は多分よく見えないと思うので、また終わった後に来て、知事を撮影するのもいいですけど、花も一緒に撮影していただきたいと思います。

私のうちは代々農家でして、この地で農業を営んでおります。私で 12 代目となります。今の切り花の栽培は、父が 23 年前から始めて、私で２代目です。年間で 20 万本の切り花を主に東京の市場に出しております。４年前に静岡県の青年農業士を拝命して、またＪＡ御殿場青壮年部として、日々地域の農業を考えております。

それでは本日の話ですが、本日は私のバラ園での取り組みを二つほど、あとそれに関連した県政への要望をお話ししたいと思います。

まず静岡県の花生産について少しお話しさせていただきますと、静岡県というのは全国でも有数の花の生産地です。生産量で言うと全体で全国の３位、バラだけですと全国で２位、全国でのシェアが 10％ぐらいあります。すごい花の大産地というのを住んでいる方が余り知らない理由としては、花の消費量というのが全国で最下位に近いらしいです。

これは私もちょっと昨日知ったのですが、「花咲くしずおか情報館」という県のホームページで見ることができます。もう愕然としますよね。消費量が最下位に近いと書いてあるということは 45～46 位だと思うのです。そこでどういうふうにしたら花が県の、県外もそ

うですけれども、やはり地産地消ということで、県内の方に買っていただけるかなというところで、今何かと注目されているエコというエコロジーですね、環境のことに関することを付加価値とした販売戦略というのを提案していきたいなと思います。

エコというと、農業でエコというとエコファーマーというのを聞いたことがあるかなとは思いますが、静岡県にもお茶を中心に約 280 件、エコファーマーを取られています。ただ、花農家の取得というのは１件もありません。これはエコファーマーというのが、どちらかというと、有機野菜とか、減農薬栽培とか、人に対しての安心・安全という意味でのエコというものであって、環境に対してというものではないということで、花で取っている人というのはいないのです。他県でも花で取っている方というのは余りいません。

そこで私はそういう地球環境に対するエコというのを売り出した、それを付加価値として花を売って、静岡県全体として売っていけないかなということで考えています。その取り組みとして、多分会場の皆さんほぼ全員初めて聞かれると思うのですが、ＮＰＳという認証を３年前に取得しました。

これというのは、商工業でＩＳＯというのがよく看板に出ていると思います、「会社でＩＳＯを取得」って。それの花の産業の世界でのＩＳＯと呼ばれている国際的な認証です。まだまだ日本で知名度が低いですが、世界で 30 カ国、5,000 団体以上が取っています。日本でも 230 団体、県内で 24 団体取っています。その中で我がバラ園が静岡で一番最初に取得しました。

これは環境の国であるオランダで始まった環境負荷の軽減のプログラムですが、中身というのが、農薬とか水、肥料、エネルギーをまずは把握して、それがどういうふうに使われているか。それで見直すことによって農薬を減らす、化学肥料を減らす、それで環境問題を解決するというものですが、そこって結構新しい視点かなと思うんですよね。今までになかったという、そういうところをこれから付加価値として、このＮＰＳというのは今のところ花だけですけれども、おいおい野菜の方にもこの認証システムを認証されるということを聞いていますので、それが県内全体で入って押していけたらおもしろいのではないかなというのを考えております。

あともう１点の取り組みについては、ちょっと時間がきたので、また後ほど話したいと思います。以上です。

＜発言者６＞

浜岡原子力発電所、あれを停止していただいたことは、本当に感謝申し上げたいと思っています。水も空気も、お花、あるいは土も汚れてしまっては、文化も伝統も経済も何も成り立たなくなってしまう、そういうことを今回の震災の中で福島第一原発は教えてくれているのではないかと、改めて思いました。

ＮＰＯ法人エコハウス御殿場では、ごみ減量、リサイクル、環境保全など、一人一人が暮らしの中で実践できることをやっていこうと、2001 年に法人化いたした団体です。任意団体からの経緯からいきますと、もう 15 年以上活動を続けております。御殿場市は、先ほどお話もありました富士山の麓にあって、ここを訪れた方だけでなくて、そこに住んでいる人も、たとえ今日みたいに富士山が見えなくても、さわやかな空気とか、すがすがしいまちの雰囲気、そういったものを感じていただけるような環境のまち御殿場を目指しています。

環境問題というと、自分の周囲の環境は自分がつくっているのだと自覚するところから始まります。それは身近な家庭環境、あるいは地域のごみ問題、そういった問題だけじゃなくて、地球温暖化みたいな地球環境の問題であっても同じです。ちょっと知事の方からサッカーの話も出ていましたが、サッカーですとピッチに立つのは 11 人、ベンチを入れても二十数人でいいわけですね。ところが事環境問題になると、サポーターは要らなのです。一人一人が自分にできることを、自分の身近なところで実践していく、それがとても大事です。自分と環境は密接につながっていると感じていただくことが重要なことだと思っています。

最近は協働という言葉も定着してきましたけれど、エコハウスでは市民と事業者、そして行政とのパートナーシップによる資源の循環型社会をつくることを目指しています。環境に配慮したライフスタイルの提案をしたり、環境教育を提供したりして、市民の一人一人が主体的にごみ減量、リサイクル、環境保全にかかわってくれるような、気軽に楽しく参加できるような仕組みをまちや地域の中につくって、それが地球や命を大切にするまちづくりにつながっていったらいいなと思って実行しております。

皆様のお手元にエコハウス通信を今日はお渡ししてありますけれど、これも皆さんにちょっと知っていただきたいようなことを入れています。真ん中に緑色のチラシがありますが、エコハウスを知らないともったいないということで、ちょっと今日お話しする時間、余りないかと思いますが、またよく読んでいただいて、ぜひエコハウスの活動にも参加していただけるとうれしいです。

こうして毎日市民が利用できる場を提供して、あるいはイベントを通して環境に配慮した暮らしをしてくださる人を増やしていきたい。特にエコ祭りとか、子供たちに向けたエコアクションというのはエコハウスの二大イベントになりますが、今年で16回目を迎えましたリサイクル祭りはごみを出さないお祭りとして、毎年環境月間の第1土曜日に開催して、今年からエコ祭りと名称を改称しました。

また、毎年夏休みには小中高校生を対象に、何か環境を考えるきっかけになったらということでエコアクション、ことしも8月10日に市民交流センター「ふじざくら」を借り切って実施するために、ただいま準備中ですけれど、どちらも行政だけではなく、この地域の企業の方、あるいは様々な団体の方、本当に多くの方々に御協力いただいて、そして実施できることは本当にありがたいことだと思っています。

長年課題としてずっと取り組んできた生ごみ堆肥化事業についても、平成20年度からは一般廃棄物処理事業協同組合が主体となり、市とも協働事業となり、今年、「ゆめかまど」という新堆肥化施設ができて、今までよりもより一層回収量を上げることができ、これを地域の中に循環できる仕組みができてきたと喜んでおります。

私は地域社会っていうのは、そこに住む人の心を反映してさまざまに変わっていく生命体みたいなものだと思うのです。私たちが御殿場や小山をよく輝かしていけば、静岡県も輝くし、そのためにそこに住む人は、このよりよい環境を次の世代につないでいく責任があると思っています。先ほどお話がありましたが、これからどんどん伝えていかなければいけないところがある。一人一人がこの行動を起こすことによって、この静岡県、あるいは日本、ひいては美しい地球につながっていくと、私たちの活動もそこにつながっていると考えて実行しています。

最後に県の方にお願いですけれど、県内に環境に配慮した暮らしがやりやすい仕組みをつくることがとっても重要だと思っています。やりたいなと思ったときに実行できる場があるということはとても大切だと思います。物やエネルギーを大切にする社会づくりを推進していただきたいと思っています。特に静岡県は物づくり県と言われています。先ほどお話しされていましたけれども、そういった技術がある県であれば、修理の技術とかもいろいろ知恵を出してできるわけですね。「もったいない」を合言葉にさまざまなものを大切にして長く使う、修理文化というのをふじのくに静岡県から提唱していただけたらと思っております。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

＜発言者５、発言者６に対する知事コメント＞

大変美しいお話を二人にしていただきまして、学ぶところが多うございました。ファーマーといいますか農業士、しかし非常にこざっぱりして、ですから農業というと土臭くて、何か都会の女の子たちが嫌がると思っていたのが、だんだんと今、何と言いましたかね、農業をやる女の人のこと、農ギャル、そういうふうに言う言葉すら出てきまして、そして子どもたちが土に親しむ機会がなくなったので、都会では山村留学までさせるというようなことまでになっていますし、今では屋上に緑化をしたり、あるいはベランダにお花を植えたりするようになってきました。だんだん緑やお花への回帰が起こっていると思います。だからチャンスが到来しているわけです。

そうした中で、12 代目で、特にバラづくりで２代目といわれる発言者の話は非常に興味深く聞きました。静岡県は、お花は２位、３位だとおっしゃいました。それは種類もそうなのですね。大体商品になるだけで 20 品目ぐらいつくっていると思いますが、それだけでなくて農産物もつくっているでしょう。167 種類つくっているのです。それは、実は皆、東京の大田市場に送っているのです。つくっているのですけど、向こうに送っているのです。つくったものをここで使ってないということがあるのです。消費力ががたっと落ちるわけですね。そういう一種独特のことがありますので、「ものづくり」はうまい、しかし「ものづかい」はどうかなというところがあるということなのです。

本当に卓上のバラは、このように美しい色とりどりの、また、本物だなと思うようなすばらしい形をしておりますが、こうしたものは芸術品ですね。だから農産物の中の芸術品ですので、農芸品なのですよ、だからよく工芸品という言葉がありますけれども、農芸品です。この農芸品の花々を使わないというのは、何ということかということです。これは使わないといけない。そのためにどうしたらいいか。県はもっと使うようにと言われました。どうしたらいいか。

これはですね、御婦人を使うことですよ。経験者は語るですね、これまで県知事室というのは大体 20 人ぐらい働いている。皆むさ苦しい男ばかりがいたのです。そして県知事室というのは、16 年間開かずの扉だった。こそっと入るというのが副知事と部長さんだけだったと。私はもう全部で四つ扉があるのですが、全部を開いているのです。そのうち一つだけ開いてないのですが、そこは開けるとタンスにぶつかるので、それ以外は全部開けてある、開けっ放しです。

そして、今日来ている、ここに知事公室、20 人のトップがここにいらっしゃいます知事

室始まって以来の女性です。トップになった。そして女性もこういうところに入れるということがわかって、人事もそういうふうになっていきまして、そうするとどうなったでしょうか。知らぬうちに１輪の花が飾られていると。そして季節ごとに花瓶も変わっている。

この花瓶を買われたのですかと言ったならば、いや、あちらこちらにしまい込まれていた。これはもういろんな人がいろんなものをくださいますから、それを全部タンスというか、押し入れというか、倉庫の中にしまい込んであるから、じゃ全部出してくださいと。いや、傷みますよと、いや、物は傷むものだと、だからもし大事なものであれば大事に使ってくださいと。壊れてもよろしい。壊れるものだと。形あるものは必ず壊れると。だからそのことについて一切問わないと。責任はもし弁償しろというなら私がするつもりであるというぐらいなので、それは構わないから使って、大事なものであれば大事なものであるほど大事に使えばいいと。そうすると物を大切に使うという気持ちも出てくるし、実際大事につくったものをくださっていて、県庁にあると。その物も喜んでいる、つくった人も喜ばれるということですから使いましょう。

そうすると知事公室から、あちらこちらから来た版画であるとか、きれいな写真であるとか、あるいは絵画であるとか、あるいは調度品であるとか、そうしたものがざっと並ぶようになって見違えるようになった。どうしてか。それは使い手が男と女と一緒になったからです。そしてそれをいいなと思うのは人間だれしも一緒です。このバラを男が女にあげるのは女性が喜んでくれるからということがわかっているから、その女性はいただいたものをきれいな花瓶に、その色に合ったようなものに飾るでしょう。それは季節季節で違うはずです。

そうしたものを使うためには、私は、男女共同参画は不可避である、不可欠であるというふうに思っているわけです。心当たりのある方はどうぞ、会社でも女性を登用する。そしてその知恵をそれぞれの持ち味を生かすということをしていきますと、回りがきれいになっていくという、そういう不思議な現象は、もう実感している人もいらっしゃると思いますので、それを加速すればいいのです。どっちにしたって、もう男は女に最終的には勝てないということは、家庭に入られた人だったら知っているはずです。そういう方向性を地域社会としてやっていくということが消費量を上げていくことになると思いますね。

そして必ずしも東京だけでなくて、日本の中で 47 都道府県で個人所得は東京、愛知に次いで３位ですから、静岡県は。それから個人消費というのがあります。つまり人がどれだけ家計からいろんなものに使うかというこの消費というのは、日本全体では、その消費分

というのは６割ぐらい占めているのです。静岡県は５割です。つまり余り消費しない、お花を買ってないということです。そういうわけでお花の分を買えと、そうすると農業が、あるいはお花であれば、花も実もあるものも買いましょうということにもなってきます。それを自分たちでつくったものは皆すばらしいものですし、春夏秋冬必ず本県には何かあります。

日本海側に行ってごらんなさいませ。全部雪ですから何もない、真っ白です。そしてそれに 10 億とか、県によっては 100 億ぐらいドブに捨てているわけです。雪をトラックに入れて、それを溝であるとか川に流しているわけですね。文字どおりドブに捨てているのに等しいのですよ。うちは、雪は富士山に降るものだと、ほとんどの人はそう思っているでしょう。要するに緑豊かなのですね。特に西高東低ですから、若干標高の高いところを除きますと、ほとんどのところに太陽がサンサンと降り注いでいる。言いかえますと、花がある、緑がある、あるいは実のなるものがあるところでございますので、それを使うという文化をつくり上げる。380 万人いますから、これはニュージーランド以上ですから一国に匹敵するのです。ここで使う。

県内消費を上げるというためには、「ものづくり」と「ものづかい」、それについては先ほど、これはもう立派な哲学を言われました。原発事故が起こる、放射能で汚染されると、セシウムだけでも何十年、あるいはプルトニウムとなると、要するに地球の生命と同じぐらいずっと残るということになりますから、そうするともう汚染されると、そこはもう戻らないということです。半永久的にこれはきれいにできない。

きれいにするということはとても大切な日本の文化でしょう。清めるという、洗い、お祓いをするというのは清める文化です。道徳でも、あんた悪いことしたねというときに、あなた汚いことしちゃだめだと言う、あの人の生き方はきれいだと。つまりきれい、汚いという言い方をするのですね。じゃどうしたら汚いものがきれいになるか。けんかしてお互い気持ちが汚くなったら、きれいさっぱり水に流して、そして仲良くなさったらどうですかと。どうして水に流せばきれいになるかというと、水がきれいだからです。どうして水がきれいかといいますと、それは森が豊かだからです。砂漠のところで、あるいは黄河をごらんくださいませ。あれはもう西から流れてきて真っ黄色ですから黄河と言う。揚子江でも泥ですよ。揚子江の河口の上海に行かれると一体何だと思う。大洪水でも起こったのかと思う。上が晴天でも泥です。揚子江というのは泥の川です。アマゾンでもそうです。よほど上流に行かない限りそういう状況ですから、日本は山と平野がすぐに迫っています

からきれいで、しかも７割が山でしょう。しかも山が十分に使われていないので、水はきれいなのですね。昔からそうでしたから、水がきれいなのは当たり前だと思っている。それが文化になっているのです。だから汚しちゃだめだというのは、汚れていると何か落ち着かないというところもあるわけです。だから日本人ほど清潔な民族はないと言われています。

しかも、お花のことがオランダからとおっしゃったでしょう。実はオランダがお花を大事にするのは近々、そうですね 300 年くらいです。どこからお花を学んだのでしょう。日本が唯一持っていた外国の相手、鎖国していたとき、ヨーロッパではオランダでしょう。日本は江戸時代ですけど、お花の楽園です。お花を非常に大事にしていました。じゃいつからお花を大事にしたのか。仏様やお墓にお花を供えるじゃありませんか。そういうこれは仏教の伝来のときからあるのです。そしてお茶の文化ができたときには、必ず生け花がありますから、江戸時代以前の室町時代からです。お花の文化は非常に根が深いです。使っているのですよ、我々は。だからそういうものは我々の文化的遺伝子の中に入り込んでおります。ヨーロッパの真似じゃなくて、我々は自分たちの持っているものをルネッサンスでいいのです。

我々はこういう最も多様な自然に恵まれている県です。一番高い山、アルプスがあり、そして森があり、そして海がある。こういうものは日本全体の縮図ですから、あるいは世界の地球生態系の縮図といってもいいから、多様な生産物ができる。農作物が一番日本で多い理由です。その中の一つがこういうお花ですね。それを使って差し上げるのが大地の恵みに対する我々の感謝の気持ちであるということで、そしてそれを大切に使って、なるべく汚さないようにするというのは大地に対する我々の礼儀です。それをおっしゃっているのですね。

だから自分たちの生き方の中でそれを学んでいきましょう、そうしていきましょうということでございます。それを子どものときから教えていこうというふうにおっしゃっている。そしてそれが都会ですと、全部コンクリートですから、生ごみを捨てるところがありません。全部ビニール袋に入れて、そしてゴミ箱に入れざるを得ない。こちらですと、こういうふうに緑豊かですから、少々のものは皆大地が全部吸収して栄養分にしてくれます。それをしかし都会的なところもありますから、「ゆめかまど」というところをおつくりになって、そこでもやっていきましょう。しかしそれは田舎であれば自分のところである程度できますから、それはそこの方が実は先進的だということです。

これからは都会的なものも選択肢の一つですけれども、都会的なものと、いわば豊かな自然景観のあるところの生活と、どちらがハイカラになるかというと、私は今この豊かな田園生活的なものの方がこれからのハイカラの生活になる。それは今江戸時代に戻ることではありません。ちゃんと電気がある、そして電化製品があるし、そしてトイレも水洗だしというふうなことであります。

トイレだって、別に下水道がなくたっていいですよ。合併処理浄化槽がありますでしょう。合併処理浄化槽というのは、日本人が発明したものです。これは生活雑排水とし尿とをこれを大地に返すのですね。大地がそれを浄化するのです。実は土というものが最も汚いものを浄化する最高の媒体なわけで、それが栄養になります。それが合併処理浄化槽で、何も全部下水道にしなくちゃいけないということはありません。全部下水道にしたのは東京です。100％しているけれども、下水にかかわる予算は１銭も減ってないですよ。ものすごいお金が使われている。維持費がかかるのです。だから下水ということをした方が、かえってモダンだと思っている人たちがいる。

大事なことは、汚いものを汚いままに川や海に流し込まないことです。それを人間の出したものは有機物ですから、したがってそれは自然の中できっちり分解されて栄養になっていくと。そうしたものの装置が合併処理浄化槽でもありますので、私は田舎に住むことは不便なことだと思っていると、それは違う。いろんな住まい方が選択肢としてあって、だから今日おっしゃったような哲学を実践する、そういういわば場といいますか、そういうものがここにあるというふうに思っております。

ですから私はその修繕文化ですか、「ものづくり」と「ものづかい」の名人になりたい。物づくりで最高のものをつくっている。最高のものを自分たちで使うという文化を持ちたいと思うのですよ。ここは借景がいい、つまり富士山を幾らかかったって、それはオイルダラーでも絶対つくれないですよ。伊豆半島だってつくれない、お金で買えない既にそういう美しい景観があります、それを借景にできますから。だからきょう行ったスピードウェイでも、あるいは樹空の森でも、ちゃんと周りを借景にしていますでしょう。人工じゃない。ヨーロッパは全部人工です。こちらは借景の思想がある。向こうは借景の思想がありません。自分たちがつくっている以外のものも庭にして使えるというメリットがあるのです。だから本当の意味で桃源郷だと思います。そうした地域をつくろうというふうに提言されておられますので、そういう考え方を共有すれば、私は運動が非常に早くなると。

そして繰り返しになりますけれども、お二人に共通して答えられることは、どうしたら

お花が使えるのか、どうしたら生花を、これは女性の持っている可能性をお互い協力し合いながら引き出す。ちなみに、ずっとこれまで日本は男中心だと思ったら、とんでもない間違いです。つい最近です、サラリーマン社会というのは。江戸時代ごらんくださいませ。今田植えの季節が終わったころだと、田植えは誰と一緒にしますか。一緒にします、男も女も。そして農閑期になる、そのときに副業をする、これも男も女もしています。まちで物を店で売っておられる。男も女もみんな一緒です。男女共同でやってきたのが、この国の社会です。

もう振り返れば、遡れば天照大御神は女だ、さらにいざなみといざなぎ、いざなみは女の神様です、いざなぎが男の神様です。２人で一緒に国をつくったというわけですから、我々の国はもともと、男女両方入っているのですね。向こうは神のことをザ・ゴット、Ｈｅといいますよ。Ｓｈｅじゃありません。神は男かと思っちゃう。そんなことはないと思います。生物界でも雄と雌がいますから、それを二つで一つだということなので、つい最近まであったことで男が中心だと思っている人たちが多くて、これが困る。特に県庁では困ると思っておりまして、そういうことでございます。どうもありがとうございました。

＜進行＞

本来ですと、もう一巡やりたいなとは思っていたのですが、大分時間も押してまいりましたので、言い残したことがあればぜひここでお願いをしたいと思います。先ほど２点とおっしゃいましたので、もう１点お願いします。

＜発言者５＞

もう１点も環境に対する取り組みで、今年から小山町で木質ペレット（おが粉やかんな屑など製材の副産物を圧縮成形した小粒の固形燃料）の製造工場が稼働します。先ほどからやっぱり間伐材を使うということが結構話題になっていまして、バラは切り花でも温室、ハウス栽培ですので、冬場の暖房としてボイラーを使うのですが、その材料を今まで重油だったのを、地元産の木材を使ったペレットという燃料にしたいなと。そのことによって環境問題に対してもいいですし、また富士山のCO_2の排出権ということでつくり出せるというメリットもありまして、本当に田舎の一農家ですけど、例えば大企業に富士山のCO_2の排出権ですよと売れるというそういう取組はおもしろいかなと思います。

あと二つほど地元の取組として、皆さんも行かれた方がいらっしゃるかもしれませんけ

ど、御殿場バラ祭りという、御殿場市はバラのまちづくりを推奨されていますね。それでその中で原里バラ園という板妻の方にあるバラ公園があります。これは先週、バラ祭りという一番きれいな時期にイベントをやったのですが、イベント後も入場料がかからずに入って、自由に堪能するまで見ることができますので、ぜひともお越しください。知事もまたお越しください。

それともう一つ、御殿場・小山の名産、特産品をもっともっと県内外にＰＲしていきたいなと、あとそれの受け皿というのが欲しいかなという話をしたいと思います。御殿場、小山は富士山の雪解け水が豊富ですので、それを利用した水かけ菜、水かけ菜漬け、あとワサビ、日本一おいしい「ごてんばこしひかり」、あとうちもつくっている花ですとか、あとお茶ですね、そういう特産品というのが東京なんかに行っても全然ぴんとこないのですね。東京に限らず静岡市とか行っても、「ごてんばこしひかり」と言っても、いまいちぴんとこないという声がよく聞かれますので、これをうまいこと売り出して、この御殿場・小山・駿東地区の農業をもっともっとＰＲして活性化していきたいなと思います。以上です。

＜発言者５追加意見に対する知事コメント＞

そうですね。おっしゃったとおりだと思います。ペレットは使いましょう。これから農業はハウス栽培とか、あるいはアメーラというトマトを大井川だとか、あちらでつくっていますけれども、工場をごらんになりますと土がありません。工場なのです、プラントと言っている。そして温度とか光を管理して、その土は、何と南方で採れるヤシの実がありますね。そのヤシの実には皮がついています。その皮を捨てるのですが、それを持ってきまして、それを砕いて土にすると。そこに入れるのですよ。種苗は全部光と温度を管理するところに入れて、ある程度育ちますと、その土のところに入れ込みまして、そして摘み取るときだけ手でやるという、ですから農業といっても、これからどんどん新しくなります。そうしたときに必ず必要なのが燃料です。その燃料源がここにありますよと言われている。

それから私はペレットと言われましたけれども、もう一つ炭というのは御承知のように、いろんなものを浄化する効能がございます。あるいはそれを敷くとシロアリが上がってこないとか、そういう効能もあると。ですから必ず炭焼きに戻るというのでなく、炭焼きもきっとちょっとした工夫をすると近代的に大量につくることができるのではないかとすら思っているわけです。この炭の効用というのもございますので、いろいろとこれからペレ

ット以外にもどのように使えるのかということで工夫をしていく時期に入ったかなと。要するに、物を無駄にしない、捨てない、捨てたものはリサイクル（再循環）、リユース（再使用）すると。そしてごみは最大限リデュース（減量）してゼロにするというゼロエミッション（人間の経済活動による自然界への排出をゼロにする）ですね。そこに向けていくということでございます。

それから水、きれいな緑の野菜、水かけ菜、それからワサビ、そしてコシヒカリですね。これはいずれも水かけ菜は名前のとおり、ワサビもきれいな水のところでしかできないということは知っているのですが、それが富士山の雪解け水というところに長野県やなんかがどんなに頑張っても勝てないと。ですから富士の雪解け水というのを上手に生かして、例えば塩をつくるとか、柿田川なんかありますでしょう。今度天然記念物になった、御存じですか。１日 100 万トン出てくる。

これを「富士の根を幾年くぐる白雪の清き水は深き」、富士のずっと根を幾年くぐる白雪、白雪が解けている、清き水は柿田川、こういうふうに言いますでしょう。だからそういう水かけ菜についても、あるいはワサビについても、その富士山というものの雪解け水、霊峰、何かそれをいただくとすうっと体じゅうが浄化されるようなイメージの俳句でも詩でも入れ込んで、文化の高いところを見せる。これをやっていくとさらに格が上がっていくのじゃないか。もう十分に格が高いのですけれども、味に格をつけてブランドにしていく。コシヒカリ、まだ量は少ないみたいですが、すぐに食べるというわけにいかないかもしれないですが、大体が本県でつくっている量で、静岡県のお米を賄えない、足らないのです。一方で１万 2,000 ヘクタールも耕作放棄地があるでしょう、これも 17～18％ですよ。これも大地に対して非常に失礼なことになっていると思いますので、それを使う。

それを使うということが実は安全につながる。もしものときに広い大地のところに住んでいれば、そこに仮設住宅を置けますから、家財道具も半壊した家からそこから取り出して、自分の庭でそれを置けるという、何も公園のところとか、あるいはどこか体育館みたいなところに行かなくても、仮設住宅をそこにつくる、自分の敷地につくる。そのためにはそれなりの土地が要ります。土地は都会にはありません。家・庭一体というのがいいんです。家・庭一体で、家・庭と書いてどうですか、家庭でしょう。家庭というのは英語で言うとホームです。ホームと言ってしまうと、庭の意味がなくなります。日本では家庭と言うのですね、家・庭と書いてホーム・スイート・ホームのホームです。だから庭で縁側に座って、家がいいねと言わないで、あっ梅がほころびましたねとか、ああ柿がだんだん

実ってきましたねとか、こういうふうな会話をするのが日本のもともとの文化ですから、必ず生活の中に庭があった。

それが実は安全保障になった。クビ切られても、そこでジャガイモでもちょっとやっておくと、幾らでもできますから、食べきれませんから、そうすると差し当たって食べるものがあるから困らない。交通事故で亡くなる人が１万人を切りましたけど、自殺者がなかなか減らないのは経済的な困窮、特に現金生活でマンションでも、自分のマンションであるにもかかわらず、管理費を払わなくちゃいけないでしょう。自分のマンションでありながら数万円管理費払わなくちゃいけない。そうすると現金収入がないと、失業保険が切れてしまうと、本当に自分の家に住めないのですよ。食べるものがありません。そこのコンクリートの中でできませんから。

そういうことでこれから本当に小山町とか御殿場市のような、そういう地域における生活の方が安全だし、きれいだし、そして安心して住んで子どもも産み育てられるということになるに違いないということで、ちょっと余計な長いコメントですみませんでしたけれども、大変感銘を受けたわけでございます。ありがとうございました。

＜傍聴者＞

静岡県で生まれて、静岡県で育ち、静岡県で働く静岡県を愛する人間として、今日はぜひ川勝さんとフランクにお話をしたいなと思い、会社を休んで来ました。

皆さんのお話を聞いている中で、やはり大震災のお話がほとんどあったと思います。実は私３月 11 日に日本にはいなくてインドにいました。皆さんが第一優先で震災のことをお考えになって、いろんなすばらしいお話を聞けたことはいいと思いますが、実は客観的に海外で日本の状態を見ていると、今の日本社会はもう一つ想定しなければいけないものがあるのではないかなと思っております。

それはお気付きの方もいると思いますが、やはりグローバル化の波、日本の常識は既に世界ではもう非常識になっています。世界の非常識が日本の常識、逆も考えられます。こういう中で、今大学生のこれから就職する人に、「あなたは海外に行きたいですか」と聞くと、３割が海外に行きたいです、７割は日本で働きたいですという答えをもらいます。企業に入りますと、それが激減して、私は日本で住みたいですと、たった１％、100 人の１人の若い人が海外で働きたいと、そういう状況の中で、やはり新聞でもあると思いますが、若者の内向きというところで、今年から小学校の英語、外国語を課そうというもので始ま

りました。先週、経団連が大学生に留学生の奨学金を勧めるという活動が始まりました。

私が言いたいのは、英語がしゃべれればいいとか、海外に行けばいいとか、そういうわけではなくて、今の若い人たち、先ほど森と子ども、環境と子ども、これからの次世代に与えなきゃいけない今日本にとって一つ、やはり海外というものが足りないのではないかなと思っています。今、川勝さんの後ろに飛行機が飛んでいますね。この資料にも書いてあるのですが、「羽ばたけ世界の玄関」という形で、私は決して静岡が悪い、日本が悪いと言っているわけではないのです。

若造が言うのも何ですが、これから来るグローバル化の波を大震災の想定と同じように想定外はなくて想定内にするような、日本を代表するような活動を、静岡県がぜひしていっていただきたいと思っております。すみません、生意気なことを言いました。よろしくお願いします。

＜傍聴者の意見に対する知事コメント＞

インドも今どんどんブリックスなどと言いまして、ブラジル、ロシア、インド、チャイナということで、日本との交流が非常に盛んです。ですから日本の今回の大震災でサプライチェーン、要するにいろんな部品がこちらでつくられて、あちらこちらでそれが組み立てられるというふうになっていまして、日本は世界の中の日本です。ただ世界というと、すぐ何か東京が世界とつながっているというふうに思われていたのですが、そうじゃないと。日本は実は南は沖縄から北は北海道まで、それぞれの地域がそれぞれの地域の特性を持って地球社会とつながっています。

静岡県は「のぞみ」が止まらないということもあり、西が浜名湖、東が箱根、あるいは北が富士山、そして南アルプス、そして伊豆半島の向こうはもう海だということで、しかもそれがそれなりの広さがあります。それなりの豊かさがあるので、割とのんびりと暮らせるというふうになっていたと思うのですが、しかし気づけば一気に東海・東南海・南海で震度 8.7 ぐらいのものがくるかもしれない。仮にきたらどうなるでしょう。

仮に福島原発のようなことが浜岡で起こったら、その半径 20 キロ以内は警戒区域になるでしょう。要するにそこに人が住んじゃいけない、人が行っちゃいけない、放射能を浴びるからと。そこに東名が走っています。新幹線が走っています。そしてそこの中に飛行場もあります。それが放射能を浴びるから来ませんよ。そうするとここは東と西を分ける境界になって、そしてここは陸の孤島になって、残るのは富士山だけになるというふうなこ

とにもなりかねない。そうした想像を十分に想定内に置かなくちゃならないぐらいの状況になっているわけです。

だから我々はこの福島の原発で世界中の人たちが日本を見た。実は日本はそういう海外、グローバルというよりもグローブというのは何かというと地球ということです。地球というのが一つだと。地球の中の重要な構成部分がそれぞれの地域だと。あるいは地球の 68 億の中の一人として、誰一人としてあなたの代わりになる人はいません。同じ人がいないのですから、どんなに息子さんが似ているといっても同じ人じゃないというところに、かけがえのない存在として一人一人がいる。ここのところを抜きにして、つまり静岡県を抜きにして地球社会はないと考えるべきです。不可欠だと、かけがえのない存在だと、何ができるか、あるいはどのように見えるか、どのように見られているか、あるいは自分でそれをどのように見るか、何ができるか。

どちらかというと、我々は恵まれている。10 億人以上の人たちが飢えています。水がない、食べるものがない、親が子どもにミルクも出ない、こういう状況がわかれば何かすると思うのです。わからないでいたけれども、いろいろ教えてくださる。福島原発のあの悲劇が教えてくれているというふうにも思います。子どものときに、学校の授業で２年前の６月 16 日、何を習ったとか覚えてないでしょう。だけどその２年前に、あるいはこの６月 16 日に仮に飛行機に乗って北海道に行った。あるいは、たまたま花巻空港から遠野に行ってそこの状況を見たと、全部家がなくなっているような三陸沖ですね、見たと、遠野をベースにして行ったら。そうすると絶対に忘れないですよ。

旅に行くとかいうようなことは、それほどに大きな影響を与えます。それはなるべく若いときにした方がいいというふうに思っておりまして、私は英語を、あるいは中国語、あるいは韓国語を学ぶことが国際化であると思ってない。自分と違うところを見ないと自分がわからない。男が女を知るのは、自分が男であることを知るのは、女を知ることを通してです。それの逆も真です。ですから自分が何者かであるということを外国に行けば、誰が言われなくても自分が日本人であるということを付きつけられますから、違うものに会って初めて自分の持っているいろいろな潜在的な自分自身に気づかされるところがあるので、それを感性が豊かなうちに皆さんに持ってもらいたいと思っているわけです。

そして行けばいかにここがいいかがわかるから、それは自信を持っていいと思っているのですが、井の中の蛙になってはならない。そういうグローブというものを相手にするだけの力を我々は持っています。もう東洋の文化も、西洋の文化もそれなりに 2000 年の間に

入り込みました。我々は知らぬうちに見事に洋服を着るとか、あるいはこういうバラを栽培するとか、もうイギリス人に負けないですよ。そういうふうに日本の文化というのはものすごいですよ。

コシヒカリが日本一おいしいと言われた。ベトナム行ってごらんなさい。あるいはタイとかそういうところに行くと、どんどん、どんどん背丈が伸びて、雨季になると伸びますよ、そういうものだと彼らは思っている。日本の米の高さが全部一緒だというのは、これは栽培に栽培を重ねて品種改良をしてきたからです。つまりほとんど人間の手が入って芸術品になっているのですね。どういうものを見てもそうです。大したものなのです。それがわかるためには外に出れば自分が発見できるということで、どうしてもそれを伝えたいとおっしゃった。それは自分の子どもにもそうさせたいと思っていらっしゃるでしょう。同じように、我々は地域の子どもたちに、青年たちにやるためには、まず自分自身が行くことです。

彼も、初めて出先の派遣社員として向こうに行って、初めてその重要性がわかったと。伊豆半島は、3,000 万も 4,000 万も年間来るものだから、どうして来てくれないんだ、知事、もっと頑張ってくれとかと言う。あんたらが行きなさいと言っている、私は。観光というのは攻めだ。攻めということは、まずいいところを見に行って、そしてそれを取り入れなきゃだめだと。

今日は樹空も行きましたけど、日本語しか書いてない。それは初めから日本人しか相手にしてないじゃないかと。韓国人を相手にしていない、中国人はどうなのだ。あるいはアルファベットがわかる人が来たときにどうなのだ。その辺のところがまだ不十分なのです。だから自分自身の国際化が必要なのです。

自分の国際化のためには１日でもいいから、見る見ないは、もう百聞は一見にしかずで違いますので、そういう文化を育ててほしい。私はそのうち新幹線の駅を飛行場の下につくりますから、それでさっと行って、さっと行って、さっと帰ってくる、そういうふうにして、何でもないことのようにして、最も住みやすい、最も訪れていい、ああ、こういうところは人類の理想郷ですねと。最先端のこういう技術者、そして森をつくるような人、そして子どもを大事にし、ごみをリサイクルする人、身体障害あるいは知的障害のある方も、それを芸術家みたいにして、それを福祉観光にしているところもありますし、農芸品の最たる花は文字どおり菊とバラとか言われますように、まさにこういう最高の花をつくれるものが全部あると。地球の文明の博物館です。

その博物館は生きた人間がつくっているもの、自分自身の力を、あるいは地域の力を信じて、それを知るために一緒に仲のいい人たちと旅に出ると。食育とプラス旅の教育、「旅育（たびいく）」というのは自分でもできますから、これは貧乏旅行も、あるいは豪華な旅行も、それぞれのＴＰＯにおいて（時、場所、場合に応じて）なさるというのがいいと思います。そうすると子どももグローバル化を全く特別なことと思わなくなるように思います。いい意見をありがとうございました。

＜進行＞

まだまだ会場からの御意見をいただきたいところでございますけれども、残念ながら時間がきてしまいました。御協力ありがとうございました。

それでは改めましてまとめということで、最後に知事から本日のまとめを改めてお願いしたいと思います。

＜知事まとめ＞

今日の午前中は、富士山の御利益がございまして、雨が降ることなく、御殿場と小山のすばらしいところを見せていただきました。

その中で例えばスピードウェイに行きましたときには、やはり福島県とか宮城県とか岩手県の野菜とか果物とか、そうしたものをレースの開催日にこちらの人たちがボランティアで売って差し上げましたとか、今度のレースのときには向こうで困ってこちらに来ている子どもたちに見せてあげるつもりですとか、そういう優しい心立てに接しまして感動したわけでございます。

今日はそういう人たちの集まりに参加させていただいて、６人の地域の方々からそれぞれの、十分とは恐らく思われないかもしれませんけれども、私は相当インパクトを受け取りました。これから、知事は、御殿場・小山町のことを東の果てにあるから、余り構ってないのだろうというふうに言われることがないように、さらに私はこちらに関心を持ちまして、この地域の人々の発展を一緒に支えてまいりたいと思っております。どうもありがとうございました。